「ではない（か）」の談話機能と音調について

大塚　淳子

要　旨

日本語学習者にとって話し手の表現意図が判断しにくい表現のひとつである「ではないか」の第１類について、談話の観点から聞き手への働きかけの程度や聞き手に期待する反応によって分類を行った。さらに表現意図を判断するてがかりのひとつとして音調について考察した。その結果、話者の驚き・意外、感想・評価を表明する場合は下降調、聞き手に認識・想起を要請したり、聞き手を非難・叱責する場合も下降調となるが、聞き手に同意を要求したり何らかの言語的応答を期待する場合は下降調も可能だが主に上昇調となると考えられる。

【キーワード】ではないか、応答期待、表現意図と音調、

１。はじめに

文末に「ではないか」「じゃない（か）」「じゃないですか」等をとる文は、日本語母語話者同士の会話でよく使われる表現だが、用法も多く、日本語学習者にとって表現意図を正確に判断するのが困難な表現だと思われる。しかし日本語の教材で取り上げられることが少なく、日本語教師用の辞典や指導書類では、用法について断片的であったり、表現意図の判断のてがかりとなる音調についてふれられていない。

ところで、犬飼(1993)は、文法研究が語用論や談話レベルにひろがるにつれ音声との接点が重要になってきていること、日本語教育の観点からも共通語の表現意図と音調についての基礎的な研究、すなわち音声文法の研究の必要性を指摘している。

本研究では、「ではないか」が談話の中でどのような役割をはたしているかを明らかにし、さらに音調についても考察を行う。なお、先行研究に従い、以後、特に断りがない場合は、「ではないか」が「じゃないか」「じゃないですか」等のバリエーションも含むものとする。

2。先行研究

「話しことば」の研究に関し、国立国語研究所(1960)は、文法研究にも音声要素を参与させる必要性を指摘しているが、話しことばでは音調はどのような役割を担っているのだろうか。

音声学の先行研究を見てみる。大石(1965)は実際の発話資料を分析した結果、「意味が音調にもっぱら依存する場合」と話し手の気分・感情を現し意味の決定というよりも「付加的な要素にすぎない」場合があるとし、「ではないか」は前者に属するとしている。また鮎沢(1989)は、会話の中で意味があいまいな場合、発話された言語的環境や前後関係とともに音調が重要なてがかりになるとしている。また文末要素の中には音調によって発話意図が変わる場合があり、そのひとつとして「ではないか」をあげている。

このように「ではないか」の場合は、音調が意味の決定に果たす役割が指摘されている。では「ではないか」にはどのような意味・機能があるのか。文法研究を見る。

田野村(1989)は「Aではないか」を意味・構文・音調から3分類している。

【第1類】Aを否定しているのではない。「ではないか」が終助詞的に用いられる非分析的な疑問文。驚きや非難などの感情を込めて表現したり、ある事柄を認識するよう求めるのに用いる。

【第2類】　推定を表現する。

【第3類】「ない」が否定辞本来の働きをする分析的な否定疑問文。

音調については、第2類は上昇調、第3類は「ない」に卓立があるとしている。しかし第1類は、上昇調も下降調もあるとし、どの用法が上昇調、あるいは下降調となるのかは特定していない。

田野村の第1類は国立国語研究所(1960)の「確認要求」に相当するが、田野村の主眼は「ではないか」を3分類することにあり、各類の詳細をみることではない。しかし、神尾(1990)の伝達される情報の所在を問題とする『情報のなわばり理論』以降文末表現の研究が進み、田野村の第1類に関してもダロウ・ネとの比較から三宅(1996)、蓮沼(1995)らによって分類が行われれている。三宅は、単文レベルで、確認する程度、内容、情報の所在を観点として分類しており、緻密だが談話の観点はない。蓮沼は談話レベルで分類を行っているが、音調についてはふれていない。また、「あなたもそう思うでしょう？」と聞き手の同意を要求するような用法についてはふれていない。

本研究は音調が確定していない田野村の第１類を分析対象とし、三宅・蓮沼らの先行研究をふまえた上で談話の観点から分類を行い、音調について考察を行う。

３。「ではないか」が談話で果たす役割について

話し手は聞き手に何らかの反応を期待しながら言葉を発し、音調にも影響を与えると考えられる。そこで、話し手が聞き手への働きかけの程度や、どのような反応を期待しているかによって分類を試みた。分析は、音声資料として自然会話、ＴＶの対談番組やドラマから203例、文字資料として対談や前後の状況がわかる小説から612例をとりだし検討した。その結果、次の３つに分類した。

①「表明」　：話し手が発見の驚きや自分の感想・評価を表明することを目的としたもの
②「認識要請」：聞き手に認識させることを目的としたもの
③「応答期待」：聞き手に認識させた結果、話の続きとしてのあいづちや応答を期待するもの

次に例をあげながら詳細を示す。

３－１。表明

話し手がなにかを発見したり意外な事態にであった場合の驚きや意外さを表明したり、自分の感想、評価を表明することを目的としたもので聞き手に期待する反応は特にない。これを便宜的に「表明」としておく。この用法には次のようなものがある。

A.驚き・意外

1)（鞠子の留守宅にミキがいる。そこに鞠子が帰ってくる。２人は20代前半の若い女性で友人同士。）
「あれ、鞠ちゃん、早かったじゃない」　（ターン）

ここでは、話し手（ミキ）の予想に反して早く帰ってきた鞠子を見つけ、意外だという驚きを表明している。早く帰ってきた聞き手（鞠子）にその説明を求めているとも考えられるが、聞き手を見ると同時にその発話がなされている

状況などから話し手の驚きをとりあえず表明することの方に重点があると考えられる。

B.感想・評価

2)（友人Ａに出会って。友人Ａの服装を見て）
Ｂ「すてきじゃない。その服、とてもいいじゃない。」（自然会話）

Ｂは目の前に現れたＡを見て感じたことをそのまま表明している。下降調で発話されている。

A.「驚き・意外」、B.「感想・評価」は、話し手が発話することによって聞き手の認識に何らかの変化をもたらすことを期待するというよりも、話し手がこれを表明することに主目的がある。発話後に聞き手から何らかの反応があっても、話し手が発話する時点で聞き手からの反応を期待しているのではない。(*1)

３－２。認識要請

聞き手が忘れている事や気づいていない事、一般的に考えて当然のことを聞き手に指摘し、認識させたり想起させることを目的として発話される用法で、ここでは便宜的に「認識要請」としておく。話し手の目的は聞き手に情報を与え、聞き手の認知状態を変化させることにあって、聞き手の応答や確認といった言語的な反応は特に期待していない。聞き手への働きかけの程度が、単に認識・想起を求める場合と、非難・叱責のように聞き手に有無をいわせないほど強い場合がある。

A.認識・想起の要請

聞き手に、忘れていることを想起させたり、気づいていないことを認識させることを目的とする用法。

想起を求める内容は、話し手と聞き手の過去の共通体験や共有していると考えられる知識・情報など、聞き手も話し手と同程度の情報があると思われることである。また認識を求める内容は、一般的に考えて当然のことや、聞き手が気づいていないことであり、時には聞き手自身に関することもある。

想起を求める例を次に示す。

3)（電話で知り合い、以後電話で心の内を吐露しあっている10代の男女。今日も電話で女が自分の悩みを話した後で女が謝る）
男「毎日電話してよ、ここに。」
女「いいの？」
男「力になるって約束したじゃない。力になりたいんだ」　（ﾋﾟｱﾆｼﾓ）

3)は以前男が女に言ったことだが、これを発話する時点では女が思い出していないであろうことを思い出させようとしている。これは話し手と聞き手が共有する情報である。

次は、認識を求める例である。

4)（好きになってはいけない人を好きになったことを悩んでいるＡに対しＢ）
Ｂ「気持ちって自分でコントロールできないものじゃないか」（ひまわり）

4)では「好き」という気持ちを抑えられないことで悩んでいるＡに対しＢは「好きだという気持ちは自分ではコントロールできない」と指摘している。Ｂの指摘は一般的には当然と考えられることだが、Ｂが発話する時点でＡはこのように考えていない。そこでＢは「ではないか」で指摘することによってＡに認識させようとしている。5)はＴＶドラマの一場面で下降調で発話されている。

5)（高校生男女の会話。男は女が自然体の演技をしているのが嫌だと言う。それに対し、女、いきなり男をぶって言う）
「何よ、あんただって私と同じじゃない。自然体って演技、してるわよ」（ﾎﾞ）

5)で男は女が「自然体の演技をしていること」が嫌だといっているが、それに対して女は「あんたも私と同じだ」と言い、男も「自然体の演技をしている」ことを指摘している。男は「自然体の演技」に否定的な気持ちを持っているので、まさか自分がしているとは思わない。男が気づいていないことを女は指摘し、認識させようとしている。

このように聞き手（男）自身に関することだが、聞き手が気づいていないことを指摘し、認識させる場合もある。

B.非難・叱責

話し手が当然そうするだろうと予測したことと異なることを聞き手がした場合や、話し手にとって当然のことが聞き手には当然でないと考えられる場合に発せられる。聞き手に想起・認識させることが目的だが、当然なるべきことがなっていない驚き・不満とがあいまって聞き手に強く働きかけ、非難・叱責となる。

6)（恋人同士の電話での会話。２人は長い間会っていない。そのことに不満を持った女が泣きながら）
「けど？けど何よ。私が(電話を)切るって言ったって前みたいに引きとめてくれないじゃない。どっか行こうって誘ってくれもしないじゃない。」(天)

7)（部下に命じた仕事が期限切れになってもできていない。カリカリきて部下を叱責している。部下は急な仕事が入ってきてできなかったと言うが）
「君は何を考えているんだい。何か方策を考えればいいじゃないか。期限がわかっている仕事を後回しにして、後からきた仕事を先にやるなんて、君の勝手な行動じゃないか。私には仕事を怠けたとしか思えんね」　(部下)

6)は恋人なら引きとめたり誘ったりするのが当然だと考えている女に対し、男は何もしない。期待を裏切られた女は男に「引きとめてくれない」「誘ってくれない」ということを非難している。7)は、当然すると思った仕事をしないことに対し、「方策を考えればいい」「勝手な行動だ」と叱責している。どちらも最終的には話し手の期待にそうことを聞き手に期待しているかもしれないが、発話する時点では聞き手に認識させることに目的があると考えられる。しかし単に認識を求めているのではなく、話し手の心理状態をも伝えるため、非難・叱責となる。

３－３。応答期待

談話を円滑に進めるために聞き手からの相づちや応答といった何らかの反応を期待して発話する場合である。話を活発にするために聞き手からの相づちや同意を期待したり、話を先に進めるために聞き手に何らかの確認を求めたり、これから話す内容をわかりやすくするために話題を提示したりする場合に使わ

れる用法である。もし聞き手からの相づちや同意、確認がなければ、話を先に進めるのに支障をきたす場合がある。(*2)

A. 同意要求

聞き手からの「うん」や「そうそう」といった相づちや共感を期待するような言い方の場合を同意要求とする。

8)（作家の山田詠美と佐伯の対談。山田の母は本が好きで自分も一緒に読んでいた。山田は「本を読むことが自分にとっては特別なことではなかった」という。）

山田「テレビ見るようなもんじゃない？」

佐伯「そうだね。」　（山田）

8)は、一般的には子どもはテレビを好み読書はあまりしないものだが、話し手にとっては読書が当然のことであり、そのことに聞き手も共感するだろうと予測して、その共感を期待して発話している。？マークで上昇音調をとっていると思われる。

9)（４人の男女が話している。１人の男性が「男が男に憧れることがある」と言うのを聞いて、女性が気味悪そうな表情をする。そこでその男性Ａが別の男性Ｂに話しかける）

Ａ「小学校、中学校の頃って、先輩がかっこいいって思ったりするじゃないですか」

Ｂ「はい、あります、あります」　（ごきげんよう）

9)はテレビのトーク番組だが、話し手（男性Ａ）が「男が男に憧れる」ということによってその場の雰囲気が悪くなる。そこで他の男性（Ｂ）に「小・中学生の頃はよくあることで特別なことではない」という同意を求めている。聞き手（Ｂ）から同意を得ることによって女性の誤解がとけただけでなく、聞き手が共感を持ち、話にはずみがつき、盛り上がっていった。

8)9)ともに聞き手からの同意や共感を得ることによって聞き手を話に巻き込

み、話を盛り上げていくことができる。しかし、もし、聞き手からの反応がなければ話し手は次の言葉を続けにくくなると思われる。

B. スキーマの形成要求

話題を「ーではないか」で提示し、聞き手にその話題に関するスキーマの形成を要求する。提示する内容は、一般的な現象やよく知られていること、話し手と聞き手の共通体験、聞き手に関すること等である。話し手が聞き手の反応を確認して話を続ける場合と、聞き手が話を引き取ることを期待している場合がある。

10)（女性２人の会話。Aの友人が大学で教えているという話題の後で。）
A「最近、携帯電話、安いじゃない」
B「うん、タダみたいなもんだよね」
A「大学生って、結構、持ってるんだって。授業中、・・」　（自然会話）

10)では大学生について話している。話し手は関連する話題として「携帯電話が安いので、大学生が大勢持っている」ことについて話そうとしている。まず「携帯電話が安い」ということに関して聞き手の知識を確認し、聞き手が「うん」とそのことを知っているという合図を出したのを確かめて話を続けている。上昇調で発話されている。

次は聞き手が話を引き取り後を続ける例である。

11)（サラリーマンの上司と部下の雑談）
「君、最近ゴルフに凝っているそうじゃないか。」
「ええ、この前、新しいクラブを買いましてね、」　（自然会話）

話し手は、「聞き手が最近ゴルフに凝っていると聞いた」と話題を提示している。しかし話し手が提示した話題について情報を持っているのは聞き手なので、聞き手が話を引き継ぐことを期待している。

以上、「ではないか」が談話ではたす役割を３分類し、それぞれのプロトタイプ的なものを下位分類として提示した。

４。音調について

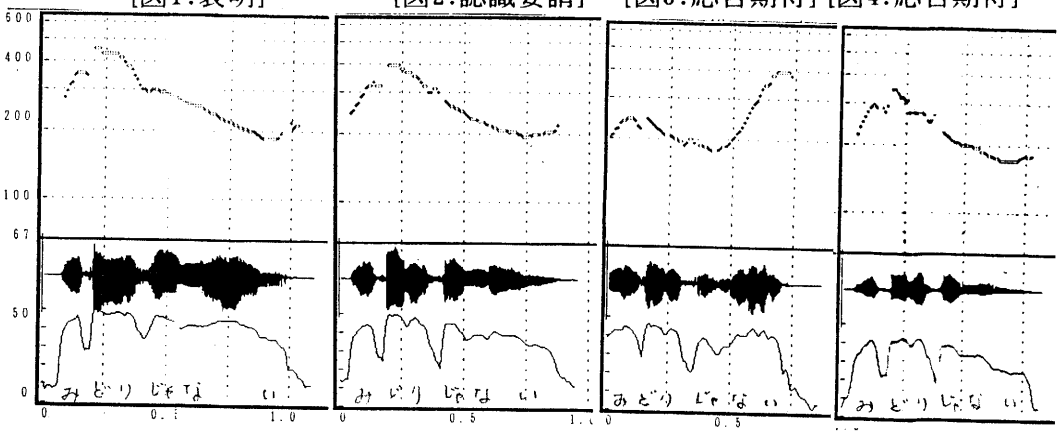
田野村(1989)では、用法ごとの音調を特定していない。そこでここでは３節にあげた分類の音調について検討する。なお本稿では紙面が限られているため、詳細な記述は別の機会に行い上昇か下降かにしぼって検討する。

分類に用いた分析資料の音声資料の音調を検討したところ、①表明は、A「驚き・意外」B.「感想・評価」のいずれも下降調となっている。②認識要請もA.「認識・想起の要請」、B.「非難・叱責」も下降調となっている。③の応答期待は、上昇調が多かったが、下降調となる場合もある。

そこで、この下位分類をもとに状況を設定したスクリプト（資料１）を作成し、東京語母語話者１３人（女性７人、男性６人）に３回ずつ発話してもらい録音する録音実験を行った。(*3)スクリプトは男性も女性も使える「名詞＋じゃない（「か」が省略された形）とした。名詞は３拍でアクセントは頭高型（みどり）と平板型（りんご）の２種類。音声分析ソフト「録聞見」と聴覚印象により音調を調べた結果は次のようになった。(*4)

①②は全員下降調となった。(図1.2)しかし③の発話は、89.7%が上昇調となった(図3)が、10.3%下降調もあった。(図4)そこで③を用法と被験者の属性の観点から検討する。(*5)

[図1:表明]　[図2:認識要請]　[図3:応答期待]　[図4:応答期待]



【用法】

下位分類の「同意要求」と「スキーマの形成要求」に分けて検討する。

＜同意要求＞

上昇調96.1%(75例)、下降調3.8%(3例)。

下降調が現れたのは女性２人(年齢30代)の平板型アクセントの時のみで、

しかも上昇調も併用している。頭高アクセントでは上昇調のみ。

<スキーマの形成要求>

上昇調83.3%(65例)、下降調16.7%(13例)。

下降調が現れたのは男性２人(50代、60代)、女性１人(30代)。男性１人は全て下降調だが、他の２人（男１人、女１人）は上昇調も下降調も可能としている。

【被験者の属性】

性別及び年齢で検討する。

女性は７人中４人が年齢を問わず上調昇のみ。また下降調と上昇調を併用した者(30代・３人)も「下降も可能」とし、上昇調の方が多い。

男性は40代以下は上昇調としている。しかし上昇調とした40代男性は、自分ではこのような表現は使わない、としている。50代、60代では「スキーマの形成要求」の時に主に下降調となっている。

以上まとめると次のようになる。

1)①「表明」②「認識要請」は下降調、③「応答期待」はほぼ上昇調だが下降調もある。

2)③「応答期待」を下位分類で見ると、「同意要求」は「下降も可能」とした者もいたが全員上昇調となった。「スキーマの形成要求」は上昇調と下降調を併用した者、下降調とした者が認められた。

3)2)の傾向は男性(50代以上)に見られた。

今回被験者が１３人と少ないが、分析に用いた音声資料や実験結果から、「応答期待」は下降調も可能だが、主に上昇調と考えられるのではないか。しかし中・高年の男性についてはさらに検討が必要である。

５。まとめ及び今後の課題

田野村(1989)では用法や音調が明確にされなかった第１類について、談話の観点から３分類し、各分類の特徴を明らかにするためにプロトタイプ的な下位分類をあげた。その結果、先行研究では指摘されることが少なかったが、次表の③「応答期待」の用法があることが認められた。

さらに聞き手が話し手の表現意図を判断する際のてがかりのひとつとして、音調についても考察した。

分類および音調は次表のようになった。

	用法	音調	下位分類
①表明	聞き手の反応を特に期待しない	下降調	A:驚き・意外 B:感想・評価
②認識要請	聞き手に認識・想起させる目的	下降調	A:認識・想起の要請 B:非難・叱責
③応答期待	聞き手からの応答・相づち期待	上昇調 (下降も可)	A:同意要求 B:スキーマの形成要求

①②は分類に用いた資料、分類後のスクリプトによる録音実験ともに下降調となった。③は下降調も可能だが基本的に上昇調と考えられる。

今回の録音実験は被験者が１３人と少なく、表現形式も「名詞＋じゃない」に限られていた。中・高年の男性（３人）については下降調が見られたり「自分はこの表現は使わない」という内省があった。表現形式も含めさらに検討を要する。

また、音調は話者の表現意図を判断するてがかりの１つではあるが、語彙や前後の文脈も重要である。今後の課題としたい。

{注}

*1　A「驚き・意外」やB「感想・評価」は、連続していると考えられる。しかし「驚き」と単なる「評価」の表明は異なると思われる。本稿での下位分類はプロトタイプなものとして提示する。

*2　ﾒｲﾅｰﾄﾞ・K・泉子(1993)は日本語の会話は聞き手が常に会話に参加する対話型で、話し手は聞き手からの反応を見ないと不安になると指摘している。

*3　実験の実施時期は1996年6月、1997年5月。

*4　男性の声が低かったり、録音状況が不良なために「録聞見」でピッチ曲線が抽出できなかった場合がある。しかし聴覚印象で明らかに上昇か下降かが特定できる場合はデータとして採用した。

*5　図の縦軸はHz、横軸は時間を現す。図1から図4はいずれも同一人物のものである。

{主な参考文献}
鮎沢孝子(1990)「意味のあいまいさとイントネーション・ポーズ」『講座日本語と日本語教育第３巻日本語の音声・音韻（下）』明治書院
犬飼隆(1992)「音声文法の試み」文部省重点領域研究「日本語音声」E12班平成４年度研究成果報告書
今川博・桐谷滋(1989)「DSPを用いたピッチ・フォルマント実時間抽出とその発音訓練への応用」電子情報通信学会技術報告
上野田鶴子(1989)「文法とイントネーション」『講座日本語と日本語教育第２巻　日本語の音声・音韻（上）』明治書院
大石初太郎(1965)「疑問表現の文末音調」日本音声学会編『音声の研究11』
大塚淳子(1997)「否定疑問文の機能と韻律的特徴-「ではない(か)をめぐって」」平成８年度お茶の水女子大学大学院修士論文
神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』大修館書店
金水敏(1991)「伝達の発話行為と日本語の文末形式」『神戸大学紀要』18
国立国語研究所(1960)『話しことばの文型（１）ー対話資料による研究ー』秀英出版
蓮沼昭子(1995)「対話における確認行為ー「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」『複文の構文　下』（仁田義雄編）くろしお出版
田野村忠温(1989)「否定疑問文小考」『国語学』152
中川千恵子(1996)「東京語の非典型的疑問文に関する研究」平成７年度お茶の水女子大学大学院修士論文
仁田義雄(1987)「日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界』大学書林
益岡隆志(1989)「プロトタイプ論の必要性」『言語』16-12
南不二男(1985)「質問文の構造」『朝倉日本語新講座４文法と意味II』朝倉書店
三宅知宏(1996)「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89
宮崎和人(1996)「確認要求表現と談話構造ー「ﾀﾞﾛｳ」と「ｼﾞｬﾅｲｶ」の比較ー」『岡山大学文学部紀要』
森山卓郎(1989)「文の意味とイントネーション」『講座日本語と日本語教育第３巻日本語の音声・音韻（下）』明治書院

{用例出典}
［音声資料］
（ごきげんよう）：TV対談番組「ごきげんよう」1996.8.29
（ひまわり）：NHK連続ドラマ「ひまわり」1996.7.30
［文字資料］
（ターン）：『ターン』氷室冴子(1994)集英社
(天)：『天使の卵』村上由佳(1996)集英社
(部下)：『部下を活かすことば殺すことば』小林正博(1988)PHD研究所
(ﾎﾞ)：『ぼくは勉強ができない』山田詠美(1996)新潮文庫
(山田)：『内面のﾉﾝﾌｨｸｼｮﾝ-山田詠美対談集』(1992)福武書店

（お茶の水女子大学大学院修士課程修了）

録音実験用スクリプト

なるべく自然に話してください。相手が友人の場合は、同性の親しい友人をイメージしてください。3回ずつ、お願いします。（下線部以外は言い易いように表現を変えてかまいません。）

①驚き：思いがけないところで友人の「みどり」さんに出会って驚いて言います。

「みどりじゃない」

②非難：部屋のリフォームを業者に頼みました。壁の色は「赤にしてください」と言っておいたのに緑色に塗られているのを見て業者に文句を言います。

「なに、これ、緑じゃない。ここは赤って言ったでしょ。」

③認識・想起を求める：中学時代の友人Aと話しています。あなたは、中学の時、バスケットボール部でした。「みどり」は2人の共通の友人です。

友人A「バスケットのキャプテン、だれだったっけ？」
あなた「ほら、みどりじゃない」

④同意要求：5月の連休にどうしていたかを友人と話しています。あなたは、新緑を見に箱根に行きました。友人も新緑の色が好きです。あなたの発言に対し、友人が「うん、うん」と言うと思って話してください。

友人　「今の季節、箱根はきれいだろうなあ」
あなた「秋の紅葉もいいけど、やっぱり、若葉のころの、緑じゃない」
友人　「うん、うん」

⑤話題提示：今、12月です。友人とクリスマスの話をしています。

友人　「12月になったばかりだというのに、町はもう、クリスマスだね」
あなた「クリスマスツリーっていえば、緑じゃない」
友人　「うん」
あなた「この前、デパートにツリーを買いに行ったら、・・・（と、クリスマスツリーの話を続ける）」

⑥推量：友人と歩いていると、遠くにいる人が共通の友人のみどりさんに似ています。

友人　「あそこにいるの、みどりかな？」
あなた「うーん、よくわからないけど、みどりじゃない？」

【資料1】

録音実験用スクリプト2

①驚き：おもいがけないところで友人の「りんご」さんに出会って驚いて言います。

「りんごじゃない」

②非難：大切な来客の予定があり、果物屋にメロンを持ってくるように頼んでおきました。当日、果物屋が持ってきた箱をあけてみると、りんごでした。果物屋に文句を言います。

「なに、これ、りんごじゃない。頼んだのはメロンでしょ」

③認識・想起を求める：中学の時の友人と話しています。あなたは中学の時、陸上部でした。「りんご」は、2人の共通の友人です。

友人　「陸上部のキャプテン、だれだったっけ？」
あなた「ほら、りんごじゃない」

④同意要求：友人と食べ物のパイの話をしています。あなたも友人もアップルパイが好きです。あなたの発言に対し、友人が「うん、うん」と言うと思って話してください。

友人　「今、パイって、いろんな種類があるよね」
あなた「でも、やっぱり、パイの中身っていったら、りんごじゃない」
友人　「うん、うん」

⑤話題提示：友人と旅行の話をしています。

友人　「青森、どうだった？」
あなた「なかなか、よかったよ。青森っていえば、りんごじゃない」
友人　「うん」
あなた「この季節、どこに行ってもすごいんだよ。りんごの木がいっぱいで・・・（と、りんごの話を続ける）」

⑥推量：果物屋で緑色のりんごのようなものを見つけました。でも梨のようにも見えます。

友人　「これ、りんごかな、梨かな？」
あなた「うーん、よくわからないけど、りんごじゃない？」